
記憶

久住 なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶

【Nコード】
N3443A

【作者名】
久住 なつき

【あらすじ】
交通事故に遭った夏子は、心臓移植の手術で一命は取り留めるが記憶喪失に。次第に思い出していく記憶の中に何故か夏子の体験した事のない記憶が。

(前書き)

この話は連載で書いていきましたが、連載で続けるのは困難のため短編で書き直しました。

夏子が事故に遭ってから二年が過ぎた。

記憶喪失と聞いた時はもう二度と記憶が戻らないだろうと思っていたが、夏子は運が良く退院して一週間経った頃から少しずつ色々な事を思い出した。

母親と父親、それに妹と家族の事はほとんど思い出した。

現在夏子は年齢で言う所高校二年生だが、学校は中学三年で事故に遭った以来行っていない。

義務教育を過ぎたのだからもう行かなくても良いのだが、夏子本人の希望で半年後の四月から少し遠くの高校に年齢の通り三年生として行くことになった。

今日は平日なので妹の夏実は中学校へ、父の晴彦は会社に行っている。

リビングで母の郁恵と二人でお茶を飲んでいた。

「ねえお母さん。私って野球してた？」

「野球？良くお父さんと一緒にテレビで見ていたけど、やった事はないと思っわよ」

「そっか・・・」

夏子は最近夢で自分が野球をしている夢を良くみるのだ。昔の記憶を思い出すように。

父の記憶もまず毎日の様に夢で見ながら思い出した。

多分今回の夢も昔の記憶なのだろうが、家には男の兄弟もいないし

バットもグローブもない。

「小学校の頃、体育の授業でやったんじゃない？」

「うーん。何かね、もっと本格的だった」

皆赤と白のユニフォームを着て、監督のような人もいて、得点版もあった。

場所は自分の通っていた小学校ではないどこかの学校のグラウンド。

「少年野球、みたいだった」

夏子は空になったカップを見つめながら、昨日の夢を思い出す。

「私は、ピッチャーで、確か八回の裏。相手が一点リードしていて、私は三振を取りたかった」

そしてボールを投げたところで目が覚めた。

「まあ、それは普通の夢だったんじゃない？だってあなた少年野球なんてしてないわよ」

郁恵の言っている事は正しい。

夏子はいまひとつつきりしないものの、この夢を見たのは昨日だけなので、普通の夢だと思う事にした。

ところが、夏子は今夜の夢でも少年野球のピッチャーだった。

そんな夢が一周間続くと、ただの夢ではすまなくなった。

晴彦は会社を休んで、三人で病院に行く事になった。夏実も学校を

休むと言ったのだが郁恵が学校に行かせた。

病院は十一時からなので今は家でのんびりニュース番組を見ている。

「では、次のニュースです。二年以上前に自殺で亡くなった男の子が、実は他殺だった可能性が出てきました。当時地元の野球チームに入っていた川崎 大輔君。VTRをご覧下さい」

そのVTRを見た夏子は声を上げた。そこにうつっている風景と全く同じものを夢で見たから。

「お母さん、お父さん！私の見た夢ってこれだよ」

赤と白のユニフォームを来た少年達。ゲームは八回の裏、ニュースで言っている男の子のチームは一点リードされていた。

そして三振を取ろうと、ボールを投げる。そこでVTRは男の子の家族に変わった。

「信じられない。夏子の言ってた事と全く同じだわ」

「でも私この男の子今初めて見た」

騒いでいる夏子と郁恵とは対照的に晴彦は静かだった。

驚きすぎて何も言えないと言った方が正しい。

「どうしたの？お父さん」

「なあ。川崎 大輔君って夏子が心臓をもらった・・・」

病院でその事を話すと医者はとても驚いていたが、もらった心臓か

らその人の記憶を思い出すのは有りえない事ではないらしい。
ただ困ったのは自殺だと思われていた大輔君が本当は他殺だった事
が今になって分かった事だ。

大輔君はきつと自分を殺した犯人の事を覚えているだろうから、夏
子がそれを思い出す可能性があるのだ。警察は秘密事項で夏子の記
憶を有力証言に加える体勢を取ったのだ。

毎日、警察から電話が掛かってくるようになった。

しかし一ヶ月経っても夏子が思い出す事はなかった。

大輔君の夢は見るものの、殺害された時の夢は見なかった。

夏子からすればそんな怖い夢見たくなかった。

警察の頼みで、一回大輔君のいた町を訪れる事になった。

夏子は夏実と二人で電車に乗ってその町にいった。

ついてみると、都会と田舎が共存しているようなところだった。

「結構遠かったね」

「うん。何か不思議な感じ、初めて来た町なのに懐かしい。デジャ
ビュかな」

「お姉ちゃんの中に大輔君が生きてるんだよ。心臓だけじゃなくて、
記憶も心も」

「・・・そうだね」

警察に教えてもらった大輔君の家に行ったが家の前は警察だらけで、
気が引けてしまった二人はしばらく町をブラブラ歩いた。

「通り歩いた後、夏実の「お墓に行こう」と言う言葉でお墓に行つた。もう二年も経てば誰もいないかと思っていたが、お花は新しいものがたくさんあつた。そして二人がいた間にも一人の女の子がやって来た。

「あつ」

この子は見た事がある。勿論夢、大輔君の記憶の中で。確かバレンタインデーにチョコをくれた子。そして言えなかつたけど大輔君も好きだった子。

「あの、こんにちわ。私達大輔君の従姉妹です。あなたはお友達？」

「あ、はい。そうです。伊藤 真紀です。大輔の従姉妹の方ですか？」

「ええ。あたしが夏実で、こつちが姉の夏子です」

咄嗟に思いついた嘘だが、妹も合わせてくれた。

「そうですか。大輔、バレンタインデーの返事聞かせてくれないまま死んじゃつて。本当に馬鹿な奴ですよ。あ、従姉妹さんに言ったら失礼か」

真紀の憎まれ口からも本当に大輔君が好きだったと言う事が伝わった。

「大輔、自殺つて聞いた時は本当、何て馬鹿な奴だつて思ったんですけど、本当は殺されたかもしれないらしいんです。その時、ちょ

つと嬉しかった。大輔はそこまで馬鹿じゃなかったって」

真紀は墓に語りかけるように言った。目には綺麗な涙が溜まっていた。

「じゃあ、これで失礼します。私はいつでも来れるので従姉妹さん大輔と話してあげて下さい」

「あ、ねえ。伊藤さんよね？」

「はい。そうですけど」

「大輔君が昔、好きな子がいるって言っててその子の名前も伊藤さんだったの。あなたの事だったのね」

真紀は一瞬顔をくしゃくしゃに崩すと、涙を堪えて笑った。

「あの馬鹿。でも、教えてくれてありがとうございます。チョコ渡して良かった」

真紀が帰ると夏実がこっちを見た。

「本当なの？大輔君も好きだったて」

「本当だよ。言った方が良かったのかは分からないけど」

その夜、夏子は布団で考えていた。今までは殺害される時の夢なんて見たくないと思っていた。

だけど真紀に出会って思った。大輔君が自殺じゃないという事で大

輔君の大切な人達が救われるなら。自分に命をくれた人の大切な人のために、自分は犯人を思い出さなければいけない。

そして夏子は夢を見た。犯人は中年の男。大輔君の、実の父親だった。

警察な夏子の証言を信じ、捜査を進めた。

物的証拠も見つかり、大輔君のお父さんは捕まった。

殺害の理由は大輔君の記憶にはないから分からなかった。

ここからは警察が頑張ってくれるだろう。

それから夏子は一回だけ大輔君の夢を見た。

生きていたら中学三年生の大輔君がその年齢の姿で夏子の家にいる。

「お姉さん、事件の事ありがとう。あと真紀に俺の気持ち伝えてくれて」

それだけ言っつて、夢なのにフツと消えてしまった。

こんな記憶がないから自分の勝手な夢だろうけど、これが最後の大輔君の記憶。

今日も夏子は大輔君の心臓で生きる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3443a/>

記憶

2010年12月19日00時33分発行